

に無面目候間、腹を切可申体候と云ふ。八右衛門愈急て、士が一度腹を可切と云て、きらずに居はせられぬ事也。急ぎ爲切よと云。此上は力不及退出す。新八次の間に聞之。勘八殿芳志不淺候。さらば腹を切可申とて、下部一兩人に鋤鉄爲持、勘八同道し、祇園の邊に穴を爲掘腹切りぬ。則勘八介錯し埋て歸ぬ。八右衛門聞て、異見に言たるを實と心得、近頃うつけたる仕形とて勘八を勘當す。然共一子故其後和睦す。秀次滅後に八右衛門は瑞龍公被召出、四千石を領し富山に奉仕す。扱神通川に舟梁出來、誰にても此梁馬上にて通すべからずと法度出て、橋際に小島九右衛門と云ふ足輕頭番所を構へて居る。或時山田勘八馬上にて橋半まで渡來る。九右衛門使を以て、誰にて被渡候哉、馬上にては御停止にて候。御存知なく相見え候。下馬尤に候と云。勘八聞之、夢々不存近頃致迷惑候。但是迄乘來り、御使を謂け下馬は成間敷とて乗打す。九右衛門、あれ御法を背く上は取込て打殺せとて打込む。勘八も随分働き足輕一人切伏せ、二三人手負せ當座に打死す。此以後八右衛門此橋を通る時は必不下馬、番所の前にて輪乘して過ぐ。番人ががめんとすれど

も人多く召連れ、其上覺悟したる体にて咎むるを待也。就其如何可仕哉と窺ければ、八右衛門父子の情にては道理也。必不可構と被仰出、其分にて何時も通りける也。

一、富田越後守の武者振

大坂冬陣に或夜城中よりつるべ鐵炮打出す。夥敷事百千の雷の如し。夜軍と心得惣軍大に躁ぐ。富田越後御先手の内なるが、手燭に火を燈し馬に乗り、片纏にて乗過し下知の体甚見事也と。

一、土屋左馬助父の仇を討つ

順禮といふ相撲の名人、三十三番續けて勝たる故に異名を得。黃門秀康の相撲の者に勝たりとて腹立被成、あれ切れと被仰候。土屋左馬助刀を抜て切らんとす。順禮遁て其先に高屏の有を飛超るを追懸け、けさ懸に切たり。順禮はやき者にて深手にあらず、右の肩より十一の俞迄疵付く。其後賀州へ奉仕し戸川宗尹といふ是也。七十有餘にて病死す。大富有人也。右の左馬助十三歳の時、家康公へ兒小姓に被召出。或時家康公園碁を御見物被成候。此碁打に左馬助父の仇あり。能き時節と哉思ひけん。脇刺を抜て、桑名にての事

覺えたるかとて首を打落す。其血家康公の御衣に濺て其儘御起被成、側に越前黃門秀康被成御座候處、秀康へ御向ひ、せがれめ成敗あれとて奥へ入給ふ。左馬助は父の仇打といなや、縁へ出で腹切たり。然ども秀康脇刺御取被成、御隠密にて療治被命ければ無程本復す。後知行一萬五千石被下候。其後秀康逝去の時殉死しぬ。家康公此左馬助といふ者は何者ぞと御尋、初て右の趣御聞被成候。

一、家康公、瑞龍公御不快の事

慶長四年八月於大坂、内府家康公使者を以て我等數年國許へ不參候。仕置等無心元候間罷下り、來春罷上り、貴方と致交代度候。但貴方先づ御下向候て來春御登候て、拙者可罷下哉と被仰越候處、瑞龍公致承知候。左候は、我等事は國許近く候間、先づ罷下、來春追付可罷上候と被仰遣候處、其段御勝手次第との趣にて、俄に八月二十八日大坂御發駕御歸國也。金澤に十日許御逗留富山へ御越、御應野にて御遊山也。冬に成り家康公より御使者來り、緩々可爲御休息と存候。上方無事の旨也。同じ時備前中納言秀家より使者、是も同じ趣也。使者共罷歸り近江路へ可參かと存候時分に、

公婦負那へ御放鷹の處へ、備前秀家より早馬の兩使來る。則公御對面の所、委細書中に申入候旨にて狀箱御披見、御機嫌惡敷早々御歸城、其日に御返書有之。其夜人持登城御談合、翌日金澤へ被成御座、金澤の人持不殘御談合也。扱内府は伏見より大坂へ御越、芳春院様並瑞龍公御前様を人質に取、番を附たりと秀家より注進也。是如何可有之哉との御事也。人持の内誰やらん、急ぎ御上京候て内府公と有無の御一戰可然と云。其外は御人質御捨被成候儀は不可成との趣に一決し、扱横山大膳を以て後山城守、様子御聞可被成とて被差遣。小松にて難通と申候處、種々斷を云て通りし所に、越前舟橋にては道に柵を振り、小門を設て嚴敷番人あり。大膳逗留し、大坂へ飛脚を以て其首尾を申遣、上方より舟橋の關所へ指圖ありて通之。大膳於大阪種々道理を盡しぬれ共、内府より色々難題を御申掛譯不立。大膳下向し委細言上す。又被遣。以上三度にて事濟は慶長五年春也。畢竟太夫人芳春院様爲人質江戸へ御引取、御供に村井豐後守罷越候。夫人織田氏は加賀へ御下向也。此出入の最中に金澤城郭の惣堀を掘たり。又種村三郎四郎、此時分は御國を立退て京都に居